



目次

- ・異国の町に出会ったら挨拶はきちんとすること …… 天津師範大学 DD 正式 3 期生 李星雨
- ・三重大学留学の感想 …… 天津師範大学 DD 正式 1 期生 斉子吟
- ・八年間の天津「留学」を終えて …… 三重大学名誉教授・国際交流センター客員教授 東晋次

本年 4 月に天津師範大学
DD 第 6 期生(正式 3 期生)
16 名を迎えました。

異国の町に出会ったら挨拶はきちんとすること

天津師範大学 DD 正式 3 期生 李星雨

初めて来たときは 3 月の末であった。

夕日が海の彼方で境界線に沈んでゆく光景を目にした名古屋空港で、湿った空気を一杯肺に吸い込んだけど、周りの人に向かって迷惑をかけるかと心配したので、海に向かって何かを叫びたい衝動を抑えながら、出口に歩きだした。荷物取りなどの手続きをして、入国審査官に「住所決まったら必ずこれを市役所に出してください」と言われて「ありがとうございます」と返事するとき、初めてここは異国であることを実感した。そして最後の「ようこそ日本へ」を耳にしたとき、つい思った。ああ、本当に、日本に来ちゃったなあ、と。

それから数日は、携帯、銀行、自転車、買い物、履修登録などで猫の手も借りたいほどだったけど、毎日新しい出会いが生まれる素敵な日々でもあった。コンビニで「いらっしゃいませ」と言われて返事に困った。街に出会ったおばあさんに「こんにちは」と言われたら「こんにちは」とできるだけはっきりした声で返事した。あまりの緊張で、指導の先生に妙に丁寧な挨拶メールを送って逆に気遣いされたこともあった。スーツを着てネクタイしめて大勢の新入生たちと一緒にあの大きいホールで参加した入学式で校歌を歌ったときの期待の気持ちも忘れない。やれやれ、慣れないって困ったものだ、と毎日苦笑いをする自分。



それから数週間、5 月病のせいか、少し憂鬱になった。1 月間の留学生活に、授業についていけないことで、日本人の学生たちに話しかけづらいことで、クラスの皆は多少ストレスを感じたと思う。土日も集中講義で、なかなか息抜きの暇

がつかめない。そんな時に、待望のゴールデンウィークはまるで救世主のようである。

初めて指導の先生にあったとき、四月の末に社会科の合宿は行事であることを知った。「できるだけ来て」と言われたとき、つい円高のことを気にして難しい顔をしてしまったけど、思い切って合宿先の温泉旅館に行った。食事で「東洋史 李星雨」



先生方とクラス一同：熱田神宮にて（李星雨君は前列左右から 1 番目）

と書いてあるカードを胸に付け、コップにお茶を入れておき、会場を回りながら出会った人に挨拶をすることは楽しかった。その後の二次会、アルコールは苦手なので、先生からいただいた未成年の黄色いカードを盾に、未成年に偽装してお茶で誤魔化すことに成功したが、そのせいかなかなか飲み会に入り込めないことは気がかった。その後の三次会で酔っ払った人が私の布団に横になってどう呼んでも起きないのを見て、つい笑ってしまった。

ゴールデンウィークに、天津で教えていただいた東先生に名古屋に招かれた。名古屋駅で待ち合わせ、皆で先生に挨拶し、地下鉄を降りて熱田神宮を目指して歩きながら雑談をした。

「日本に来て、どう？」

「色々あったけど、楽しいです」

「そうか。君の日本語も、上手になったね」

ああ、ちゃんと、進んだんじゃん、と釈然とした。

ここはよく知らない国の街だけど、出会った人ときちんと話を交わし、交流を深めれば、困ったことも慣れないことも誤解されたことも理解されて、期待も楽しみも分かち合うことが出来る。だから、今の私は誰かに感じたことを聞かれたら、このように答える。異国の町の人々と出会ったら、まずは「挨拶はきちんとすること」である。

斉子晗さんは DD 正式 1 期生として 1 年間本学部で学び、天津師範大学で学位取得後、再び教育学部に留学しました。

三重大留学の感想

天津師範大学 DD 正式 1 期生 斉子晗

2015 年 9 月再び日本に参りました。空港まで到着したときにはすでに夕方でした。今回は前回と違って、一人での旅だったため、とても寂しかったです。幸いに親友が空港まで迎えに来てくれました。半年ぶりの親友とは距離感が感じなくて、すぐ話ができてよかったです。親友と津市までの船に乗り込んで、日本ならではの夜景を望みながら、これからの一年間はどのように過ごしたらよいかを考え始めました……

まだ着いたばかりだといっても、のんびりする余裕がなく、すぐ様々な留学手続きに取り組みました。相変わらず授業が多いほうですが、前の留学経験を生かしてすぐにこの忙しいペースに慣れました。今年から新しい物事にチャレンジするよう決めたため、必修授業のほか英語の授業もいくつか受講しました。中国の大学でも英語の授業を取りましたが、英語圏からいらっしゃった先生の授業を受けるのは人生で初めての経験でした。これまで以上に本格的な英語を学びながら、欧米文化に関してもいろいろ勉強になりました。

去年の 12 月に三重大学てらこや国際交流サークルからの誘いを受けて、名古屋で開催された国際交流学生シンポジウムに参加しました。実際に外国へ留学された方々の話および愛知教育大学、名古屋大学における異文化交流の様子を知ることができました。私も光栄のごとく、三重大学の留学生代表として、自分が今まで参加した異文化交流経験を紹介しました。このシンポジウムに参加したおかげで、日本国内では数多くの異文化交流をされている様子が見えて各地からの方々と貴重な話ができました。

このような活動に時々参加していたのも原因ですが、卒論研究のため猫の手を借りたいぐらい忙しかったです。後期に中間発表会もあったため、緊張の毎日でした。まだまだ自分の日本語能力に自信を持っていない一方、教育心理学という私にとって新しい分野のものを発表するのはとてもストレスを感じました。そのため、たくさんの論文を読む必要があると覚悟し、ほ

ぼ毎日図書館に行くようにしていました。私はポジティブ感情とネガティブ感情を中心として研究をしていたので、日本語の文献のほか、英語の文献もたくさん読む必要がありました。前期に取った英語の授業がとても役立ったと常に感じました。発表会前の 2 か月は担当の中西良文先生と何度も相談しました。自分が書いた文章には語彙の使用や文法の間違いがたくさんありましたが、先生は私を慰めながら熱心に文章を直してください、とても感動しました。

2 年前は私はまだ研究とはどんなものかを知らなかった人間でした。日本で勉強していたこの 2 年間を通して、みなさんが研究に対する慎重さをこの身で体験できました。私は形式に拘らなく、あまり真面目ではなかった人間でしたが、こつこつ物事に取り組む人間まで変化しました。研究するとき、何度も困難にぶつかって、よい結果が出ない場合諦めることも考えました。中西先生そして、身の回りに励ましてくれた親友たちのおかげで無事に一年間の学業を完成させました。これからも学んだ知識を生かして社会に有意義な人になるよう頑張ります！三重大学、そしてずっとそばにいてくださった方々、どうもありがとうございました。



ゼミの中西先生と仲間たち

天津師範大学合作弁学プロジェクトの企画時から奮闘され、退官後も長期派遣教員として 8 年間にわたり、天津師範大学生の日本語教育に尽力された東先生が帰国されました。DD プログラムを支えてこられた先生には感謝の念で一杯です。

私は、三重大教育学部を退職して間もない 2009 年 4 月中旬からあしかけ八年間、天津に在住し、先月 7 月末に帰国しました。この間、三重大と天津師範大学との協同教育協定にもとづき、三重大派遣の二名の教員の一人として、天津師範大学国際教育交流学院合作弁学三重日本語班の学生(一学年 20 名)に日本語などを教えておりました。2006 年 9 月入学の一期生から 2015 年 9 月入学の八期生まで、計約 160 名の主として天津市や華北地域出身の学生たちです。担当科目は一貫して「聴解」で、学期によって「日本事情」・「閲読」・「高級日語」・「作文」なども引き受けました。天津市の繁華街へ地下鉄で 5 分もあれば行ける「八里台」という便利な地点にある留学生宿舎の一室で单身生活を送り、世界各国からの留学生たちとも親しくなりました。ケニアやタイ、アメリカやロシアの留学生と中国語で

八年間の天津「留学」を終えて

三重大学名誉教授・国際交流センター客員教授
東晋次



三重大学北京、天津 OB 会 (2010.12.18)
会話をするときの奇妙な感覚、これまでの人生で初めての体験

でした。

八年間の日常・非日常は、師範大学の先生方との交流、最も多くの時間を割いた授業とその準備、そして学生達との食事やカラオケなどの遊び、週に一・二回程度の伊勢丹デパート周辺での一人食事と日本食材の買い込み、太極拳同好会の天津市民との友誼、TJBC(天津野球倶楽部)の日系企業会社員との思いもよらなかった野球の練習や試合そして飲み会、三重大学全学同窓会中国支部(北京)および三重県人会(天津)の会員との時折の会食、などなどによって構成されます。また、ほとんどは親切だが時には外国人客に対して悪さをするタクシーの運転手や地下鉄での敬老精神に溢れた若者たち、レストランやスーパー、街の市場でのごく普通の天津市民、そういう様々な中国人に対し初級の中国語でもって立ち向かい、嬉しかったり悔しかったり、いろいろな思いにかられた数々の場面、実に豊かな異社会体験をしてきました。飛行機や新幹線を利用した国内旅行では、上海・杭州・南京周辺、山西省の大同・太原、広州・澳門・香港にも行きました。私はむしろ出不精でしたから、もう少し若くて元気があれば、もっと多くの地域に旅行できたでしょうし、天津市内の隅々まで冒険の散歩もできたでしょう。



二期生と三重大宿舎で (2011.11.05)

しかし、日本語指導という本務がずっしりと肩にかかり、八年間の後半はほとんど毎日「修改」(練習答案朱入れ)の作業と教材研究・授業計画に時間を費やしたというのが実情です。三学年の学生 60 名が相手ですから、少なくとも週に四コマの聴解の授業、それ以外の担当科目がある場合は、5~6コマにもなりました。学生が飽きますから、教科書以外の聴解教材として日本の童謡・歌謡曲やラジオ放送の音声にも手を伸ばすことになります。私が八年間の間に作成した日本語の学習資料には、200 頁余の『総合漢字練習帳』(日本漢字の読み方練習問題集)や国語教科書その他の文章を集めた『閲読用参考テキスト』、童話や短編小説を盛り込んだ『閲読用参考テキスト童話編』(三冊本)などがあります。すべて「朗読」を学生諸君に要請するための資料です。その他にも、「日本語の数詞」・『『お』と『ご』のつく語一覧』・「身体各部等を用いた語句一覧」・「日本・中国の名詩(朗読用)」などがあります。授業で配布する細かな資料も合わせるとかなりの量になります。これらはすべて両大学の好意で製本化してもらったり、あるいは電子ファイルで学生諸君に配布しました。また、卒業生と在學生との情報交換のための「八里台通信」を6号まで編集し、メールで全卒業・在學生に配信もしました。

それやこれや一生懸命やりましたが、一生懸命にやりさえすればいいというものでもありませんね。一生懸命のやり方が問題です。それには、この合作弁学プロジェクトに関するしっ

かりした信念や学生への愛着の念、教育方法・カリキュラムの確立、師範大教員や三重大関係同僚との宥和など、欠いてはならない前提条件もあります。これらも論じ始めると膨大な枚数になりますから、以下では「天津の八年間」の自己総括を述べるにとどめます。



三期生卒業式典 (2014.06.19)

表題がちょっと奇を衒ったように見えますが、私の心中では率直に言って「留学」してきたのだという思いが強くあります。その理由の一つとして、日本と中国の言語について多くを学んできたことが挙げられましょう。中国語はむしろ初級止まりでしたが、日本語や日本文化についてのいい加減な知識や理解を反省する機会が与えられたからです。日本語を一知半解のままで使用していたケースが時々あり、内心忸怩たる思いをしたことも一再ならずありました。そういう場合は学生に対してできるだけ早く修正と補足を行いました。日本語が日本文化の一部である以上、日本語の学びは日本文化へのより深い省察に向かわざるを得ません。

上級学生から「弁当をひろげる」という表現はどうして「ひろげる」と謂うのでしょうか、と質問されたことがあります。弁当をあまり使わない中国人にとって、「お重」という容器は想像もできないのでしょうか。着飾って花見や山野水辺に遊ぶかつての日本人の娯楽には弁当がなくてはならないもので、それを敷物の上に並べる、ここから「ひろげる」が生まれたのではないかと思います、と咄嗟の思いつきでおそろおそろ説明すると、なるほどと納得してくれます。「晴れ着」を説明するときも「ハレ」と「ケ」の相違に触れれば、日本人の生活感覚や時間意識についてもより深い了解が得られることになります。こういう事柄を「教える」立場に立つと、それまでの浅薄な日本文化の理解では刃が立たなくなるのです。しかしこれらは異国で日本語を教える際には当然のことでしょう。

私が「留学」と言う場合のさらなる理由は以下のようなことです。先に触れたように、天津でのいろいろな中国人との交流があり、具体的な生活の場でいろいろな疑問を感じました。師範大の先生方や学生諸君の行動様式でさえ、日本人としての私の常識と食い違います。最初は抗議したり文句を言ったりしました。しかし次第に彼ら中国人が何故そのような言動をとるのか、次第に理解できるようになりました。例えば、卒業式などの公式行事の日程が間際にならないと決まらない、いろいろな行事の連絡が直前にしか為されないのは何故か、は中国社会の人間関係の構造から説明できました。教室における学生の不可解な言動が中国人の「面子」と深く関わっているのだ、ということもかなり時間がかかりましたが、気づくようになったわけです。

このように、8年間にわたる中国の社会制度の中での生活や、いろいろな中国人との交際を通じて、中国人とはどういう行動

様式を有し、どのような自然観や人間観を持っているのか、その中国人によって構成される社会の特質とは何か、をつねに考え続けてきたのです。そこから得られたのは、日本社会や日本人を客観かつ相対化して見る視点です。書物や議論の上のものではない、実際の生活の中での貴重な経験です。私にとってもし中国で生活していなかったらおそらく十分には体得できなかった思考方法です。これが「留学」でなくて何でしょう。



あるとき、小間物屋に入って土産物を探したことがあります。案内の中国人学生に、ここには無いようだね、と日本語で話しかけたところ、奥から中年の女性がツカツカと私たちに近づき、中国語で、この店は日本人には売らない、と言いました。学生はどうしてですか、とやや抗議調で問いましたが、店長は答えませんでした。私は、いやいいからと言って外に出たことがあります。学生はまだやや興奮気味でしたので、私は言いました。もしかしたらあの店長さんの親族のどなたかが日本人に殺されたり傷つけられたりして日本人を憎いと思っているのかもしれない、個人はそれぞれの個人の歴史を引きずって生きているのだからあの店長さんには店長さんの想いがあるでああいうことを言ったのだと思う、だから別の店にしよう、と。私はその店主に対してちっとも怒りや怨みを感じませんでした。むしろそういう人が中国に存在するのだ、ということを知ったことによって大いに考えさせられたのです。

私の中には、以前から、中国人に対するある種のコンプレックスがあります。つまり、日本がかつて中国を侵略したという歴史的事実から生じた相済まないという気持ちが心のどこかにあって、それが、中国古代史を専攻し中国士大夫・文人の偉大さ、そして何よりも日本文化の原基としての中国文化に敬意を抱いている私に、中国に対する一種の劣等感というか、複雑な気持ちをもたらすのです。おそらく私と同世代の方々には、中国の人々に対して相済まないという気持ちが心の奥深くにあって、できるだけ友好的な態度を以て接したいという気分があるのではないかと推測します。これまでの中国各地における民間レベルの日中友好交流は、おそらくこういう気持ちを持った日本人によって推進されてきたのではないのでしょうか。

先の店主に対する私の態度は「寛容」という言葉で表現できるのかもしれませんが。一般的には寛容は相手に対する深い「理解」がないと生まれにくいと思います。異なる文化モードによる行動への理解は、日本人的な、日本文化に拘泥し固着した発想では決して生まれません。「友好は易く理解は難し」という言葉があるように、相手の文化を真に理解しないと、相手の行為に対する寛容な気持ちを持つことはできません。中国人に関する日本のマスコミの罵倒に近い報道に接するとき、いや日本人

だって少し前までそうだったではないか、とか中国人の発想を理解できていないなあ、などと弁護したい気分に駆られます。相済まないという気持ちは、謝罪とか償いという方へはただちには向かわないのですが、もう少し中国人の側に立って理解してあげたいという気持ちを抱きやすいのです。中国側もそれに応えて次第に寛容な気持ちを持つようになれば、もっと友好的な態度で接してくれるようになる可能性があるのです。そのためには、単なる「友好」だけではなく、友好を支える「文化の相互理解」がどうしても必要です。若い中国人留学生諸君が日本に住んで日本人と付き合い、そして日本の社会や文化を良く理解する、また日本人の若者が中国へ留学して中国人の行動様式を驚きの目で見て、日本人と比較しながら「日本的なもの」を相対化する、そういう若者による文化の相互理解、これこそが我々の合作弁学プロジェクトの根幹になければならない志向性だと思います。



私が八年間いや交渉開始から今まで十数年にわたって、この合作弁学プロジェクトに挺身できたのには、以上のような私の「中国感」とそれに基づく「日中関係の未来」に向けての願いがあったからだと思います。何もそこまで中国の一大学に尽くすことはないではないか、中国の学生の教育も大切だが日本の学生の教育はどうなんだ、日本の国立大学が損をしてまで中国人の教育に注力する必要があるのか、などなどの「日本的」な反感や批判があることは承知しています。三重大の学生が天津師範大学へ留学しない理由もいろいろとあります。それはきわめて残念なことです。しかし、私はいまこれだけは確信して言えます。天津で知り合った一期生から八期生の本プロジェクトに参加した中国の若者達が、日本語や日本文化に対して限りない愛着を持ちつつ生きていくこと、そして将来も中国と日本の友好関係を心に願いながら生きていくであろうことを。



最後になりましたが、新たな国際間教育の「かたち」を創設し、この十数年間それを守り続けてきた教育学部の多くの教職員との連帯こそ、私の第二の人生における愉楽でありました。このプロジェクトに参加できてよかったと、皆様に心からお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。